

アルメル・フォール氏活動報告会

## 「国際機関で人類学者として働くこと」 〜世界銀行、アメリカ、ベトナム、マダガスカル、フランス〜

名古屋大学大学院人間文化研究科 市川 哲

二〇一五年十一月九日に名古屋  
市立大学滝子キャンパス一号館第  
一会議室で開催されたマンデーサ  
ロンでは、本学人間文化研究科に  
客員研究員として滞在した、世界  
銀行コンサルタントであり、同時  
に文化人類学者でもあるフランス  
人研究者アルメル・フォール氏  
(Armelie Faure) による「国際機関  
で人類学者として働くこと」世界  
銀行、アメリカ、ベトナム、マダ  
ガスカル、フランス」という

テーマで、大学・大学院での研究  
や西アフリカでの民族誌的フィー  
ルドワーク、それを基にした世界  
銀行での開発関連のコンサルタン  
トとしての世界各国での活動、さ  
らには近年、母国フランスで行っ  
ている聞き書き調査といった、自  
己の研究とそれに基づく諸活動に  
ついてお話しいただいた。なお当  
日のお話は参加者の使用言語を考

慮し、英語でなされた。当日は学  
内・学外より三〇名以上の方々  
が参加した。中には自身が開発業務  
に従事した経験を持たれる方々や、  
他大学で開発関係の研究に従事し  
ている方々もおり、日本の大学で  
の英語による発表・討論にも関わ  
らず、活発な質問やそれに対する  
応答、議論が展開されたのが印象  
的であった。

フォール氏はフランスの大  
学・大学院にて文化人類学を学  
び、一九八二年から一九八七年に  
西アフリカ、ブルキナ・ファソの  
ピサ社会を対象とした現地調査に  
従事した。当時、フォール氏が調  
査したピサ社会は農業や牧畜を主  
要な生業としており、フォール氏  
はそこでピサ社会の社会構造や生  
業、世界観といった「典型的な」  
民族誌的調査を行っていたように  
ある。だがフォール氏の調査後、

ピサ人居住地では「バグレ・ダム  
(Bagele)」という大規模ダム建設  
プロジェクトが実施された。この  
大規模ダム開発により、ピサ社会  
は多大な影響を被ることとなった。  
ダム建設以前からピサ社会の詳細  
な調査を行ってきたフォール氏は、  
ダム建設によるピサ社会の移転問  
題や、それに伴う生業や世界観の  
変容等、多様な側面を、文化人類  
学者特有のローカルな社会に寄り  
添う形で詳細に調べた。大規模ダ  
ムの開発は、当然のことながら当  
該地域の生態学的環境に多大な影  
響を及ぼす。大規模開発による影  
響は住民移転のような社会的な側  
面のみならず、例えばゾウやカバ、  
特定の樹木といった、ピサ社会の  
世界観で神聖な位置を占める動植  
物の生態や生息地も変化させ、そ  
れがピサの人々の儀礼や世界観も  
変化させる、といったように、精

神的な側面も変容を余儀なくされ  
るといった、多面的な結果をもた  
らすこととなった。フォール氏は  
緻密な民族誌的調査により、これ  
ら多面的な現象と問題点をモノグ  
ラフとして出版した。

一九八〇年代以降、世界各国の  
文化人類学界では、「古典的」な  
社会構造や世界観のみを抽出し無  
時間的に描く人類学的姿勢を反省  
し、開発人類学や応用人類学と  
いった現実問題と積極的に向き合  
う姿勢が重視されてきた時期でも  
ある。だがフォール氏はこのよう  
な表層的な流行により、バグレ・  
ダム建設がピサ社会に与えた影響  
を調査しモノグラフとして記した  
わけではない。当日のマンデーサ  
ロンの直前に筆者がフォール氏と  
個人的に話した際には、フォール  
氏はフランスの大学でクロード・  
レヴィ・ストロースやダン・ス  
ペルベル（彼女はスペルベルのこ  
とを自分のメンターだと表現して  
いた）といった、構造主義人類学  
や認知科学の素養を身に付けてい  
たと話していた。その上で、現地  
社会での「古典的（これは肯定  
的な意味である）」な民族誌的調  
査を行い、それらの学問的な基礎  
の上に基づき、人類学者として大  
規模ダム開発と地域住民との関係

をいかにして理解するか、そして研究者としての立場からいかにして大規模ダム開発と現地住民との相互関係のような現象を理解するべきか、そして理論とフィールドワークに立脚する研究者の立場から、いかにして政策に提言するべきか、について自己の意見を語っていたのだ。このことから、フォール氏の研究は一見、八〇年代以降、ある種の流行のようにもなってしまった、開発人類学や応用人類学の中に位置づけるべきではなく、むしろフランスにおける古典的な業績と最新の理論の双方に立脚しながら、大規模開発という現代社会が抱える問題に向き合うという点で、他の皮相的な研究とは一線を画すものであることがうかがえた。

その後、フォール氏は一九九三年より世界銀行のコンサルタントとして採用された。フォール氏によると、この仕事には地域住民の再定住に関する調査活動に携わる業務であり、世界各地から約三〇〇人の文化人類学者が応募したとのことである。最終面接に呼ばれたフォール氏は、ニューヨークでおおよそ一週間にかけて、十五人の社会科学者の面接官を相手にした面接を受けたことから、その

シビアさがうかがわれた。その結果、世界銀行のコンサルタントとして採用されたフォール氏は、これまで世界十八か国で大規模開発が現地住民に与える影響、およびそれを踏まえた上での報告書の作成や政策提言、理論と実践の架橋といった活動に従事してきた。世界の中でもある意味、理論的な人類学的研究の古くからの中枢でもあるフランスで高等教育を受け、文化人類学的なアフリカ研究で博士号を取得したというフォール氏が、開発現場での調査という仕事の主とはいえず、世界銀行という国際的な開発援助組織のコンサルタントとして働き続けたというのは、大変興味深いことであるといえる。

当日のサロンでは時間の都合もあり、フォール氏がこれまで活動してきた十八か国すべての国々でのお話を聞くことはできなかった。当日は特にフォール氏の活動の中でも西アフリカのモータニアにおける都市計画、中国における高速道路建設と地域住民の関係、東アフリカ沖合のマダガスカルにおける観光開発と環境保護、といった三つの事例についてお話しただいた。

モータニアでの都市開発に関しては、フォール氏は他の領域の

専門家、特にエンジニアと社会学者とが共同して行ったプロジェクトであり、一〇年がかりのものであったとのことだった。フォール氏の意見では、このプロジェクトが成功したのは双方のネットワークが成功したのは双方のネットワークや意思疎通がうまくいったことや、再定住計画の対象者やスラム住民の様々な意向（例えば親族や知人同士でまとまって生活したい等）をモータニア政府がくみ取り、その意向を反映した形で再定住計画を実行できたことにあるとのことである。また再定住地での学校や病院の設立等、住民が必要とする施設を効果的に設立し、また治安の維持も上手くいったことが挙げられていた。

その後、フォール氏は中華人民共和国の湖南省と湖北省でも、高速道路の建設に伴う住民移転の問題に関する現地調査と報告書の作成を行った。だがこれまで主にアフリカで活動してきたフォール氏にとって、中国での活動は困難が多かったとのことである。フォール氏は西アフリカの四つのローカルな言語を理解し現地住民と意思疎通することが出来る。そのため西アフリカでの活動では住民との意思疎通や基本的な社会構造や社会背景などを理解していた。しか

し中国での活動では、まず中国語という言語の壁が存在した。さらには中国でフィールド・データを得るために現地調査をする、いつも現地当局者が四人ほど同行するのが常であったとのことである。そのため必ずしも自分の希望通りの現地調査が行えたわけではなく、場合によっては現地でインタビューしても、これら地元の間関係者が答えてしまい、住民の意見を聞くことが出来ないこともしばしばであったとのことである。だがこの中国での調査では、フォール氏は中国の現地の研究者とともに調査・研究する機会に恵まれ、これは非常に良い経験だったとのことである。

中国での調査後、再びフォール氏はアフリカのマダガスカルでの観光開発に関するプロジェクトに従事した。しかしマダガスカルはフォール氏がこれまで調査してきた西アフリカとは文化的にも社会構造的にも異なる点が多く、モニター調査やプロジェクトの遂行は困難を極めたとのことである。フォール氏は、モータニアでの活動が成功であったのに対し、マダガスカルでの活動は失敗だったと率直に述べていた。マダガスカル

氏の専門である西アフリカの社会構造と異なる以外にも、マダガスカル政治体制や環境保護政策、さらにはプロジェクト遂行の最中に生じた政治的混乱などにより、この観光開発プロジェクトはストップし、事実上、失敗してしまつたとのことである。だがフォール氏は、このような経験についても、人類学者として、開発計画やモニター調査といったオペレーションは、いつも成功するとは限らない、失敗することもあるのだ、という、自分や自分を取り巻く背景を突き放して捉える、ある意味、文化人類学者に特有な、ネガティブな表現を用いれば言えば冷めた目、ポジティブに捉えれば相対主義的な姿勢を取っていたのが興味深かった。あくまでも報告者の意見であるが、このような「冷めた目」「相対主義的な姿勢」というリアリズムに満ちた態度こそ、開発援助という活動における、文化人類学者特有の貢献なのではないかという印象を受けた。

これら世界銀行のコンサルタントとして従事したフランス国外での三つの事例に加え、フォール氏は最後に、近年フランス国内で行っている、ドルドーニュ(Dordogne)川流域における、

ダム建設とそれに伴う住民移転、移転した住民たちの生活に関する聞き書き調査プロジェクトについて紹介してくれた。ドルドーニュ地方には現在、三〇近いダムが存在するが、ダムの建設に伴い、フランス政府がフランス人を再移住させている。フォール氏は「私はこれまでフランス国外で住民の再移住問題を調査・研究してきた。またそのような研究者は数多く存在する。だがフランス国内でも同じような現象はある。私は大規模ダム開発による住民移転に関する知識を向上させよう」と決意した。だが海外で調査研究する研究者は、私やハマモト(本学人間文化研究科の濱本篤史准教授のこと)のように自国での問題意識を持つ者が極めて少ない」と述べていた。

第二次世界大戦後、フランスの経済は疲弊していたこともあり、国内に五〇〇から六〇〇に至るダムを建設した。そのうち一五〇近くが大規模な電力発電ダムとのことである。ドルドーニュ川沿岸地域もその例にもれず、数多くの住民がダム建設のために再移住を余儀なくされた。これに対しフォール氏は人類学者や開発研究者だけでなく、口述史家(archivists)とも協力することにより、ドル

ドーニュ川流域に居住していた住民の口述史を聞き取り、記録するプロジェクトを開始し、それによって得られたデータをアーカイヴ化する作業を行った。またこのプロジェクトの過程で、フォール氏やそのメンバーはドルドーニュ地域の住民の手紙や詩、写真等の様々な資料も収集したとのことである。フォール氏は、この聞き書き調査によって作られたアーカイヴは、ドルドーニュ地域の住民の居住地に関する感覚や家族に関する記憶の保存にもなるだけでなく、将来の世代に残すべき記録にもなり、子供や孫の世代も、祖先がどのような経験をしたのか、祖先の地に何があったのかを知るといふ点で、声のない人々の声を集め記録する重要な作業である、と述べていた。

そしてフォール氏は本セミナーの最後に、特に本学の学部生や大学院生に対し、ぜひ大学で学んだことを活かし、世界銀行のような国際組織で活躍してほしいこと、もし自己の専門が文学や歴史のように一見、国際組織で役に立たないように思えたとしても現場での調査や政策提言にとって無益ではなく、それぞれの学問がそれぞれの立場から有益な役割を果た

せること、「毎日、同じ机に向かつて、同じ業務をするような、つまらない仕事に就くことばかり考えず、自分には何ができるかを考え、それを実行に移し、楽しくエキサイティングな仕事にぜひ就いてほしい」というメッセージでプレゼンテーションを終えた。そして若い学生や大学院生は、本を読み、フィールドワークのトレーニングを積み、ぜひ多くの国際組織の仕事について欲しい、例えば世界銀行は定期的に人材を募集しているので、ぜひこのセミナーに参加している学生・院生も、私のように応募してほしい、と言って、世界銀行の人材募集のURLも提示してくれた。

当日のフォール氏のプレゼンテーションは通訳をつけない英語での話だったのにも関わらず、会場からは様々な質問やコメントがなされ、またそれに対するフォール氏からの熱心なリプライがなされた。会場からは、台湾における先住民社会での観光開発の問題点についてや、再移転後の人々の職業が一时的な就労になってしまわないかという問題、開発援助の際の資金の流れの透明性の問題、異なる学問分野の研究者や専門家との共同の方法、コンサルタント

として得たデータをいかにして学術的な論文として利用するかという問題等についての質問がなされ、活発な議論が展開された。

本セミナーは日本における英語での発表・議論や限られた発表時間といった各種の制限があったにも関わらず、非常に白熱したものであったと思われる。これは一つには、世界銀行コンサルタントであり、かつ文化人類学者でもあるフォール氏の経歴とそれに基づくプレゼンテーションが様々な人々の興味関心を引き付けたこと、同時にフォール氏が抽象的かつ専門的な話題に限定せず、自己の半生を紹介する形で、大学・大学院での学習や研究を、アカデミックな世界の中でのみ完結させず、より広い分野で活用してほしいという、若い世代に向けた希望に満ちたメッセージに合ったと思われる。今後、本学が国際化を進め、世界レベルでの研究水準の向上やグローバルなレベルでの学問的ネットワークを構築する上で、今回のアルメル・フォール氏のような優秀な研究者の招聘および共同研究は、必要不可欠なものでないかと思われる。